

ミリオン巨乳 ハーレムつくす!

million big tits harem sex!



地方での仕事先のホテル。
部屋で飲んでいる莉緒、風花、恵美（恵美はジューズ）。

恵美「風花ってホントに
浴衣でも引き立つ綺麗な体だね〜」

風花「やっぱりめつ〜恵ちゃん」

莉緒「うふふ私だつて負けてないわよお」



恵美「莉緒はこういう所で
見せようとするからモテないんだよ」

莉緒「こういう所で見せるからモテるんじゃないの?」

恵美「隠すほうがそそられるんじゃないの?
まあどつちにしろモテるのは風花だよ
でも風花つて悪い男に騙されそうだな」

莉緒「性格良いもんねえ」



恵美「つまらない男に騙されて初めてを奪われそう」

莉緒「ちよつと恵美ちゃん

飲んでないよね？そつちの話ししちゃうの？」

恵美「私は風花の心配をしてるの」

莉緒「もー風花ちゃん顔真っ赤じゃないの」

風花「こつこれは酔っ払ってて！」



恵美「あっ……アタシはもう済ませてる所決まってるんじゃん」
風花「わっ……私だけ処女なんですわね……」

二人「……………」

莉緒「何よ今の間は」

恵美「だっ……だからさ……今となりの部屋に

プロデューサーいるじゃん？」

莉緒「まっ……まさか夜這い！」

恵美「言い方っ！……でもそういう事

変な男よりプロデューサーなら風花だっでいいでしょ
ねっ とっつげきいっつー！」

風花「ちよつ…ちよつと待つてよ恵美ちゃん 私は…」
恵美「もうこういいうのは勢いが大事だから！ねっ！」

莉緒「…でもあの真面目な

プロデューサーくんが素直にに応じてくれるかしら」

恵美「ええく押しかけたら怒られるかなあ」

莉緒「…は経験者同士きえまじりよ」

恵美「…そつ…そつだねっ 経験者同士！」

風花「ううう…帰りたい…」



隣の部屋。

晩酌していたプロデューサーの元に電話が。

「どうした、莉緒？」

「いや、もう一人で飲んでるし、遊びにだって行かないから。」

「恵美も一緒なのか？恵美に飲ませてないよな？」

「おいおい……こんな時間まで一緒に遊んでたらダメだろ……」

「恵美も早く部屋を出なさい」

「仕方ないな……だから遊ばないって。恵美……はやくその部屋を出て寝るんだ俺には監督の責任がだな……」

「莉緒もいい大人なんだから……」

しびしぶ部屋を出て、恵美たちの部屋に向かうプロデューサー。
だが、ノックをしても誰も出ない。
ノブを回すと、ドアが空いた。中は真っ暗。

「なんだ？おい、誰もいないのか？」
奥へ進んでいくプロデューサー。

薄暗い部屋で、莉緒のシルエットが見える。

プロデューサー…マッサージしてくれないかな…
どこでも…好きなどころをさ…」

「な…！？莉緒…は…は…は…は…は…は…は…は…は…は…は…は…」

と、恵美がプロデューサーの後ろから飛び掛かる。

二人はベントウ。

「ちよつ……!? 恵美!?!」

「プロデューサー!」

「ちよつとおとなしくしててね!」

「莉緒 押さえてて」

「私が先じゃダメ?」

すっ...

「はひひ〜ごめんね〜」

「ちよつと……二人共……何をやる気だ!?!」



プロテューサーの顔を覗き込んで
ふんふん、莉緒の胸が頬を覆う。

「ふんふんプロテューサーさん……」
「ふんふん……」

ふん
ふん

ふんふん
ふんふん
ふんふん

ふんふん……
ふんふん……

ふん
ふん……

「ねえ……プロテューサー……脱が
恵美はTシャツ
目の前にはブニ

抗おうにも、吸い寄せられるように
手が動き、ブラのホックを外す。

「じゃあ…ちも…」

脱ぎかけのショーツに手をかけさせる。

ふんふん♡

ふんふん♡

んんん♡

ふんふん♡

「お…おい…まさ
「まさかだよプ
大っきくなつてマ

ショーツを脱がすと
恵美の弾力のある尻が…

「まひひひ〜プロレスナーサ〜…ふんこ〜な」

「よ…よろしくねじゃないだろ…お前…
いいわけないし…経験だつて
ないだろ？いいのか？」

ふん…

しぎょ

しぎょ

しぎょ

ピッ

ピッ

ピッ!!

「けっ 経験だつた
あるよー甘く見な

気持ちでは拒否しているつもりだが、ペニスはフル勃起し、まるで拒否できていない。

ましてや、莉緒のいい匂いのする胸の谷間に挟まれ、

あの迫力のある巨乳に顔を挟まれているのだ。

立场上拒否しなければいけないが、体が全く動けなかった。

「二応避妊具くらい持ち歩くのがモテる女のたしなみよねー」

しかし何だか たどたどしい手つきで

避妊具を無理やり

露出させられたペニスに着けられた…。

「じゃあ挿れるよ？はああうう……！」
莉緒(うわっす)「……ほんとに入ってる……！」
「ううう……んうう……！」

ぽちぽち

「……あうたかう……！」

「はうう……んうう……」
お……奥まで……余裕だし……」

ぬち

ぬち

グググ

莉緒(うわっす)「……あうたかう……！」

しかも、
莉緒

結合部から二筋の血が…
「だ…大丈夫か？恵美…！」
「だっ！大丈夫大丈夫！
ぜーんぜん平気！」

莉緒(いたそう…)

恵美が明らかに痛そうなの
動きをしているが、
溢れる莉緒の愛液が
顔中に付着する興奮で、
腰を振ってしまう。

「うん…うん…うん…
うん…うん…うん…
うん…うん…うん…
うん…うん…うん…」

莉緒「あぁっプロ
すいブル
そんな気が
あっ…！」

42

42

「.....射.....射.....射」

「あめめー！プロテューサー.....んあっ.....あ.....気持ちよくなってるっ.....」

あめめー
あめめー
あめめー

ゴダァ
ゴダァ

「射す.....恵美.....」
「.....射精.....」

「.....射.....射.....射」
「.....射.....射.....射」

ゴダァ
ゴダァ

「にやはは しちやつたね プロデューサー…」
「す…すまん恵美っ…興奮しすぎて…」
「あぁんっプロデューサーくんっ…あぁんっ！」

俺は抜かぬまま、腰をすぐに振り始めてしまう。

莉緒の女陰は酸味もあるが
フルーツのように甘く、なにより
陰唇のぬるぬるして弾力のある感触が
まさに果肉を味わうようだった。

べちゃ
めちよ
めちよ

ドゴッ!
ドゴッ!

「あぁあっプロ
いいよ…もっ
もっと気持ち

「舐めて
プロデュー

んっ
もっ
もっ



結局この体勢のまま、

俺は莉緒の女陰を思う存分舐めながら、

抜かずに恵美の膣でさらに2回も射精してしまった。

恵美はまだ痛そうだったが、何度も絶頂した……。

ペニスを抜くと、精液でタプタプになったコンドーム。

そして破瓜の証拠であろう血。

恵美は絶頂のまま、ベッドに倒れ込む。

「次は私の番ね…」

「お…おい…莉緒…莉緒もやるのかっ!?!」

莉緒の愛液まみれでなんとも女のいい匂いにまみれた俺の顔を見つめて言う。

「そのために呼んだんだもん」

「莉緒も…いいのか!?!」

「プロデューサーくんだもん…悪いわけないわ」

恵美とのセックスの快感がまだ抜けきつてない。体が動かない。莉緒は俺にキスをする。

またしても逃げられなくなってしまった!

あああっ...!!

「はああああ...ううう...」

「おおおおおおお...！ 莉緒...！」

「あ...プロデューサーくんのが...中...」

「莉緒...ああ...感じません...」

「莉緒...！ 痛くないか...？」

「わっ...私初めてじゃないからっ...」

んっ...！ こんない女が

初めてな訳ないっ...でしょ...！」



ズググ



「ちょっとまあ

アタシ抜きとかないんじゃないの？」

こんどは恵美が女陰を差し出してきた……!

「あっプロデューサーくんっ

気持ちいいよっ！ひとつになってる……!

私とプロデューサーくん……!

気持ちいいよ……!

「莉緒っ！はあっはあっ！

むぐぐっ！莉緒……!

莉緒だけでも気持ちいいのに、恵美の蜜まで……!
「あっ……あっ……プロデューサーくん……!
「莉緒っ……おおお……！駄目だ……出る……!」

ズ
ズ
ズ

ズ

ぷん
ぷん

ぷん
ぷん

あ
あ
あ

あ
あ
あ

ん
ん

ん
ん

ん
ん



「はあっ…あ…あ…あ…」

プロデューサー

くんっ…あ…」

「莉緒っ！莉緒！」

「あんっ…！すげっ…莉緒も…」

プロデューサーも感じまくってる…」

「ああっ…んっ…」

幸せっ…ああ…あ…」

「莉緒っ…んっ…」

あ…っ…！

あ…っ…♡

ドッ！

ビッ！

ビッ！



もちろん、射精後も腰が止まることはなかった。
仲良くしているアイドルとの禁忌の背徳、
しかしその分大きくなる感動。

「プロデューサーくんっ…もっと…もっと…
もっと気持ちよくなりたいな…覚悟はいい…？」
「莉緒…！気持ちいいぞお…莉緒っ！」
「ああんっ プロデューサー舐めるのすっ…！
へへっ 気持ちいいっ…」

恵美の味はジューシーで酸っぱいが陰唇の弾力が強く、
舐める度に弾き返されるような、舐めごたえのある女陰だ。
「莉緒…恵美…！ああああ…！」



とんでもないことになってしまった。

がこの快樂の渦から

逃れることは到底出来そうにない。

恵美の時のように莉緒と続けて

更に2回セックスしてしまう…

莉緒「…つてえ！本当の目的はこれじゃなかった！
普通に楽しんじゃったわ…！」

おもむろに立ち上がって、莉緒が恵美を起こす。

「あつー！そうだった

そうだったよ！風花！」

「風花！？」

「プロデューサーをその気に

させたら風花を呼ばないと！」

言うと、二人はクローゼットへ向かい、
その扉を開ける。

ガキや...

「.....」

「風花！ずいっとさー！さー！？」

「ぶ...プロデューサーさん...」

「風花大丈夫っ！？もらして...っ！？」

「違っわ...風花ちゃん...すく濡れてる...」

びとっ

「こういうの見るのなん
二人とも何だかすごい
男の人の裸も全然見た」

風花はぐしよぐしよに濡れた股間を押さえ
「準備はできてそうだけど…風花大丈夫？
なんかごめん…無理に誘うちゃって」

「ごめんね風花ちゃん…やっぱやめる？」

「それはう…！たしかにプロデューサーさん
してもいい気持ちだったのであるし…
してみたい気持ちもありますっ！」

でも…しちやいけない関係だとも思い
私…素敵なアイドルってファンを裏切
アイドルだと思っんです…
だから本当はしちやダメだと思っ…」

「…でもっ 自分で気づいたんですけど…
セクシーになっっているっていうか…
今までにないくらい色っぽく自分でも感

ハア
ハア
ハア

びん

「いつもセクシーな仕事させられがちで、今の自分ならいつも以上にいい仕事ができそうっていうか…」

今の状態をきっかけに良い意味で更にセクシーに変われそうかなって…

「それに…体がおかしいんです…」

二人の玉ツチを見ながら…

何回も…その…イってしまっ…

私の体が…うずいて…

うずいて仕方ないんです…

これじゃあ眠れないし…

しばらく仕事も集中できないかも…

びく

びく

うざ

うざ

けあ

けあ

「もし抱かれることで解消されるなら私がよりセクシーになれるなら…良いアイドルになれるなら…本当は清纯が良いですけど…私が素敵な女の子になれるなら…！」

風花のシヨーツからは愛液の雫が滴

じょ

「莉緒さんや恵美ちゃんが言ってる事1回だけで良いんです…抱いて下さプロデューサーさん…!!」
もう…わからなくなっちゃってしまっ
でも…抱いてもらえればきつと…」

「駄目だ…駄目だ風花…！駄目だ
言いながらも、俺は完全に勃起し

「すまん 二人共…風花も…すまん…

こんなことをしてしまつのは俺の責任だ…全部責任は持つ…
だが…今は…本当にすまん！」

こちらとしても理性の働く余裕がなかった。

完全に性欲に支配され、目の前には目も虚ろ、
しかし体は絶頂の繰り返しで火照り、
ますます色気を放つ

豊川風花が抱いてくれと言っているのだ。

「風花…風花の気持ちにはわかつた

一度だけ…抱かせてくれ…!!!!」

「はああああああああああ
ああああうううっ!」

「おっ…! おおおおお
おおおっ! 風花っ…!」

ずっと絶頂を繰り返し、本能的に
ペニスを待ち望んでいた風花の体は、
待望のそれを受け入れると
同時にキツく締め上げる。

くっついて…

破瓜の痛みなどどうでもよくなるほど、
風花は快感に体を支配されていた。

はあはあ
あまなまなま♡

「はあああああっ! す
すごいですっ!—
プロデューサーさま

「風花っ! 気持ちいいぞっ!—
莉緒と恵美もWで乳首を責め

い
い…

い
い

い

い

い





あぁ！
あぁ！

ほ

ほ

ちゅぽん
ちゅぽん

ちゅぽん

ちゅぽん
ちゅぽん

ふん
たん

ふん

たん

あ♡
あ♡

あ♡

「プロデューサー
あつ…あ…！こ
こんなに気持ち
これがつ…あ
プロデューサー

「乳首弱点なんだプロデューサーくん？
あとさ 知ってるでしょ？私の舌…器用なのよ
セラシーテクニクで…ねっ」
「プロデューサーも風花も
すっごく気持ちよさそうじゃん」

「風花っ…！ちゅぽん…
すっごく…熱すぎる…！
そっくキキキ…！
感触はやわらかいの
全体的な締めがっ…！」

「風花っ…風花…
出る…！あ…！あ…
「はあっ…プロデ
私たちひとつにな

あぁあぁ!!

ドッ!

ドッ!

ドッ!

「おおおっ……おおおおおっ……
なんて締め付けだっ……あああ……
気持ちよすぎぬっ……おおおお……
甘いっ……甘いっ……射精の快感が甘いっ……」

はぁ♡お♡お♡お♡

「あぁっ……あ……
あ……あぁあぁっ……」

「風花っ……風花……!
「はっ……あ……あ……
感じますっ……プロ……
気持ちよくなっ……」



あぁあぁ!!

いっい

アハハハ
アハハハ
アハハハ

だが…風花も自分も1回では
おさまっていないかった。
どちらともなく無意識に
腰が動いてしまっていた。

「んっ…!
ふたりともすっごいなく…
ずっと我慢してたのかな」

「風花ちゃんすっごいわね…
とんでもない色気よ…ソロソロモン
溢れまくってて凄くモチそう…」

たっん

たっん

ゆっん

ゆっん

あぁあぁ!!

「あぁっ…
恥ずかし
私もどう

「すまん風花っ…ま
あまりにもセクシー
快感が甘くて二回

結局その後、風花とも

2回たつぷりセックスを繰り返した。

火照った体が静まらず、

内に眠った性欲を爆発させるように

風花は乱れ続けた…。

風花は、放心状態で、普段なら絶対しないような下品な下に股で仰向けになっている。

まだ快感が抜けきっていないらしい。

「まだいけるよね？」

セックスを終えたばかりのペニスに舌を這わせる恵美。そして莉緒も。

ちろん...

レロ

「おっ...」
「私たち忘
プロデュー

「おおおおっ……！」

「にひひく敏感になつてるのっ」「
美女二人に同時に舐められるとは……！」

「じ……じうやつて……ふ……」

袋のほうから……

舐めあげるのとか……

いいんじゃないの……？

いいでしょう？モテそうでしょう？」

「あっ……あ……恵美……莉緒……！」

そして数十分舐め
続けられ……俺はつい……



あまりの快感で、
気がついたら射精していた。
しかも、自分のプロデュース
しているアイドルの
大事な顔に……！

「わぶっ!?
プロデューサー!?」

「ああんっ……!
プロデューサーくんっ……！」

「あああっ！ダメだっ！
止まらないっ！気持ちいっ！」



「あああ…すまん莉緒…恵美…！」

「いいよいいよ拭けばいいし
プロデューサーのだったら
嫌じゃないしね
にしてもチヨー
出でんじやん濃いやつ…」

「ム…でちやあんと舐めて
飲んじやうのが
いい女じゃないかしら…」

びび

びび…

ドロ…

お

ベト…

ドロ

「抜かりお

「莉
やり
パタ

「うてかさー莉緒ってば処女だったんでしょ」

「恵美ちゃんこそどうなのよ 私は違うわよ…」

処女だったらこんなエッチなことできないでしょ…?」

そう言っていると、莉緒は形よく大きな
ヒップをこちらに向けてきた。

莉緒は身長169センチと

上背があるので体に迫力がある。

そしてヒップと、露になって

愛液にまみれた女性器を俺の顔に…!!



「むぐっ……おっおっ……おっおっ……」
「ひゃあ、やるねえ莉緒、アタシだつて負けないよ」

ぬるっと熱い愛液の感触と
やわらかくふにふにしてる
ムニムニ、トロトロと独特な

お互い違う女性器の感触が、
甘く生っぽい匂いと共に俺の

「ムニムニ……トロトロ……」
経験豊富な女でしよ

が、なんとそこに風花も…！
「何か…お酒と気持ちいいので…
変なスイッチ入っちゃったみたいです…」

3人のやわらかく発情した
トロトロの甘い女陰が同時に顔に

「私もプロデューサーさ
気持ちよくさせたいです

「あぁっ…風花…恵

ソッポ

グイグイ

ぬた

ぬた

ぽろ
ぽろ

いっ
ぽろぽろ♡

びびり

びびり



ん

んん

んんん

んんん

んん

んんん

ハイ
ハイ

3人がそれぞれの性器を押し付けて、俺の顔はまざりあつた3人の愛液まみれに。甘く、そしてスケベな匂いが混ざりあつて、幸福感と淫猥感が飽和状態だった。確実に死ぬ前に走馬灯に出てくる。

「プロデューサー……どう……？
3人のどれが一番良い……？」

「私よね？風花ちゃんにサイズ負けるけど一番大人でいいで……」

「プロデューサーさん……あ……おっ……おちんちん……私の胸……まだビクビクひてますう……」

「あ……
すげえ……」

ん

んん

んんん

(おおおおおおおおおっ……！
すごい光景だっ……！……！)

莉緒は俺の頬から腰を離すと、
そのまま女性器を
見せつけるようにする。

むあっ……

(莉緒のお尻は
とにかく綺麗だ……
莉緒のモデルのような
容姿そのままだ。
桜のようなピンク色で
艶めかしいが
整いついては6mmで
芸術品のような……！)

ぬちよ

ぬちよ♡

「ほらほら……プロキティサーベントの
もう我慢できないうでしよ……
誰に挿れたいの……？ 私よね……？」

「莉緒〜そんなの
したら引くって〜」

「しょ…処女じゃないんだから
「いやらしいやなぞしょー」」

莉緒はぎこちなく尻を振る。
恵美もそれに付き合うようにする。

（恵美のは全体的に小さめで
陰唇や陰核も小さめだし
事実挿入時もキツかったが
小陰唇のヒダが広くて
いやらしい艶めかしい…！）

「プっ…プロデューサーさん…っ
そして風花も尻を振る

が
が

が
が♡

が
が♡

が♡

が

「モテる女はじゃなくから
当然やるはずよー!」
「風花お尻もやっぱすいーね…!」

「ぶ…風花…これは
仕事じゃないんだから
こんな恥ずかしい格好
無理しなくても良いんだぞ…」

「ぶ…プロデューサーさんだけに
見せるなら…はあっ…むしろ…
見てもらいたいです…」

「んん〜言うねえ風花あ
プロデューサーのアン」
反応しちやってるよ!」

「くっ…だが…風花の
小陰唇が大きく色こそ
ものの瞳自体は綺麗か
どっしりとした風
迫力があって素晴らし

「さあっプロデューサーくん…
アイドル3人の…
誰のがいいの…?」

「プロデューサー

アタシまたしたいなあ〜」

むちむち♡

「はっ…はあっ…!!
プロデューサーさん…!!」

それぞれの愛液が垂れ、
それぞれの女陰の匂いが
溢れるこの密な空間…!!
フル勃起の気持ちの赴くまま、
俺が選んだのは…

むち

むち♡

むち

むち♡

「はあはあはあ……」
「はあはあ……あう……」
「風花の中……」
「おしり……」

すげえっ!

身長162センチ。
ヒップのサイズ90センチ！
目の前にすると
やはりものすごい迫力だった。

「あああ……プロデューサーさん……」
「気持ちいい……」
「あらら……風花ちゃんを選んだのね……」
「にやはは！ 負けちゃったね」
「ウチら押しが強すぎたかな？」

「でもじつとなんて
してられないわよね……？」

莉緒と恵美はその

ゆはん

「なんなんーっ」

プロデューサーくん
乳首弱点よね わかつちゃった

私のセクシーテクニクで…
サービスしてあげるわ♡」

はぁはぁ!

はぁはぁ!

「ん〜アタシは
ちゅっちゅしたげよっかなー」

風花の、きついが肉厚で

ふんわりとやさしい臍ど

二人のW乳首舐めで興奮はMAXに…

たはん

たはん

たはん

「…あ…あ…あ…あ…あ…あ…あ…あ…あ…あ…あ…あ…あ…」

「はああっ…プロデューサーくん…」

「あぁっ……！あぁっあぁっあぁっ！
風花っ……風花あぁあぁあぁっ！」

「んううううううう……！
はぁあんっ……！あ……！
んっ……んあぁあぁあぁっ！」

「風花っ……おおう……はてあっ……
気持ちいい……！あぁあぁ……」

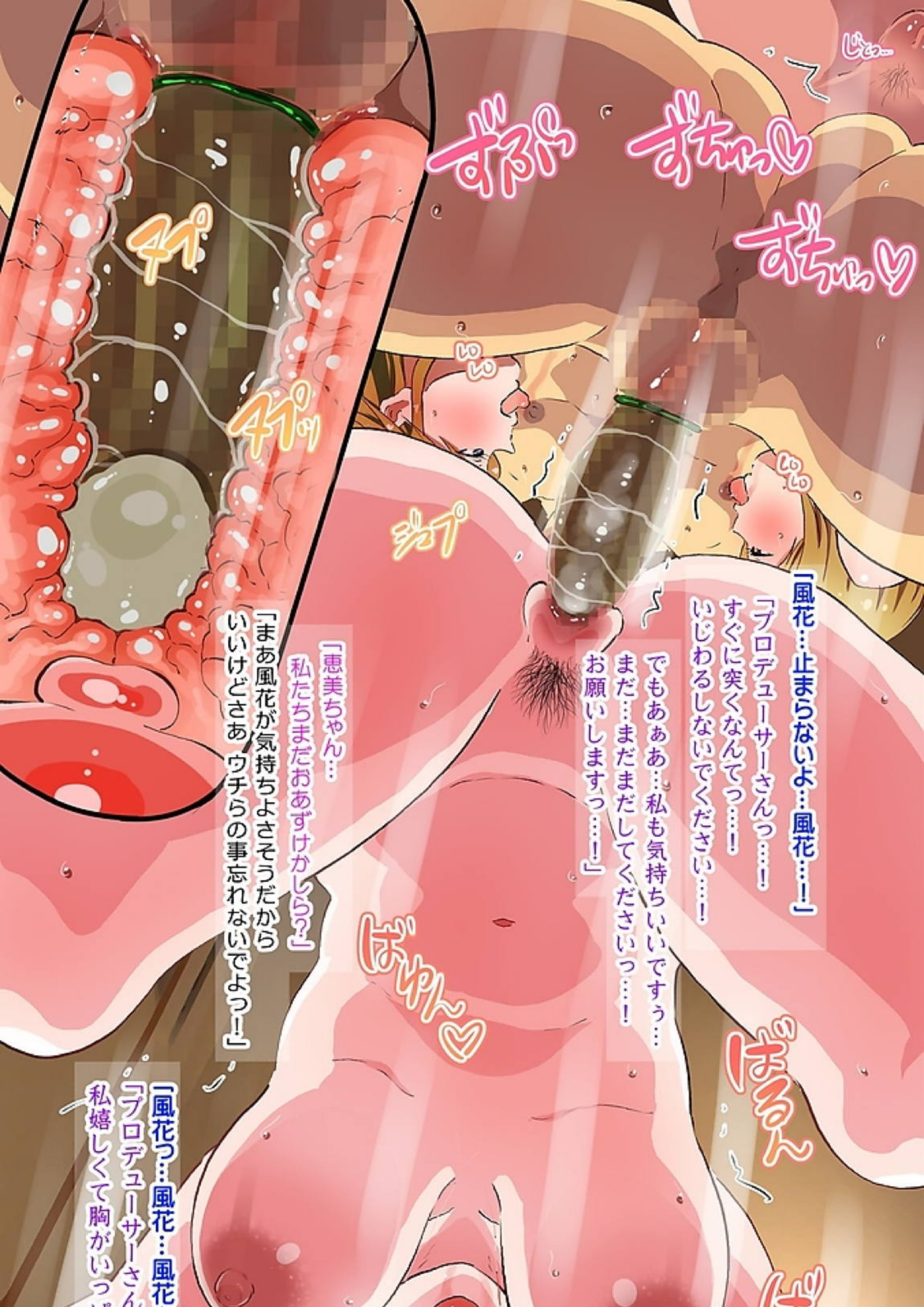
「プロデューサーさん……！
私もすごく
気持ちいいですう……！」

「ひゃあ……すごっ二人とも……！」
「風花ちゃん気持ち良さそうね……！」

ドッ！！

ドッ！！

ん



「風花…止まらないよ…風花…！」

「プロデューサーさんっ…！」

「すぐに突くんなんてっ…！」

「いじわるしないでください…！」

「でもあああ…私も気持ちいいですう…」

「まだ…まだまだしてくださいっ…！」

「お願いしますっ…！」

「恵美ちゃん…」

「私たちがまだおあずけかしらっ！」

「まあ風花が気持ちよさそうだから

いいけどさあ、ウチらの事忘れないうでめっ！」

「風花っ…風花…風花」

「プロデューサーさん

私嬉しくて胸がいつっ」

いつの間にか夜が明け、ホテルの部屋には日差しが。

「もう朝じゃん！…」

つていうかプロデューサー！

まさか露天風呂貸し切ってたんの？」

「あ…ああ…だが俺が希望したんじゃないぞ

ホテルに来たら貸し切られてたんだ

イベントの担当の人がサービスでつて…

気を使ってもらつて悪いから断ったんだが…」

「ええーじゃあ入らないと勿体無いじゃん！

せうかくだから使おうよー！」

「いいのか？今日は3人ともオフで観光を…」

「プロデューサーくんは…」

休むつもりがある

ようつには見えないけど？」

「……」

相変わらず美女3人に囲まれて、

ペニス为天を突いたままだった…。

美女3人の裸を前に

萎えるほうが無理なのだ…。

今度は女性器でなく、おっぱいが俺の顔を圧した。

「はあっ……う……おっぱいで息が出来ない……幸せすぎる……」

「私おっぱい戦力84よおプロデューサーくん！」

「それ言ったらアタシ88なんだけど風花は？」

「わわっ……私は……93……です……」
「うっ……墓穴掘ったわ……でも……形によさでは負けてないの……」

「はあ……はあ……」

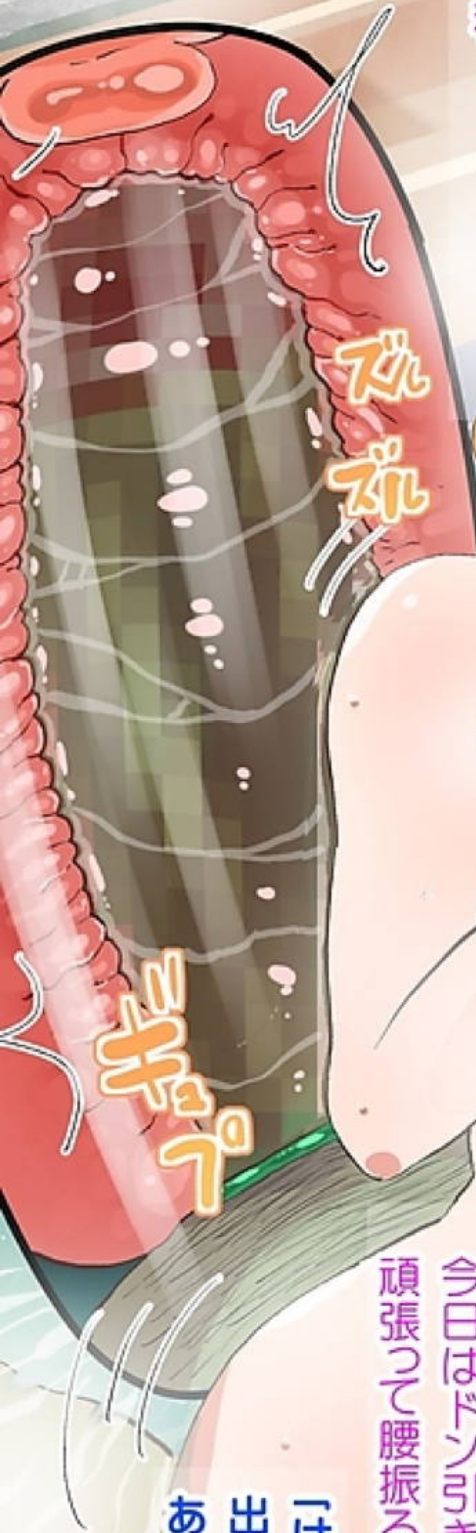
3人の
甘い匂
気持ち
会話が
入ってこ



俺は呼吸をしようとする
莉緒たちの吐息を吸うことになり、
おっぱいに顔を戻すと
おっぱいの匂いを吸うことになり、
幸福だが窒息しそうだった。

「ほらほらプロデューサー
気持ちいい？」
蠢く巨乳と、莉緒の膣。

「はっ…は…プロデューサーくん…
どう…どう…うちの戦力も
…あ！どうしてよ私…」



今日はタン引きされたって
頑張つて腰振るから…」

「は…莉緒…す
出そうだ…出
あぁ！あぁあぁ

ハハ
ハハ♡

「莉緒…あめ…それ…」

「あめ…」

「気持ちいい…」

「あめ…気持ちいい…」

「あめ…気持ちいい…」

「あめ…気持ちいい…」



「あめ…」

「あめ…」

「あめ…」

「あめ…」

「あめ…」

「あめ…」

「気持ちいい？
もうプロフェッサーくん
独占欲強いんだからあ
ずいぶんいいなあげつかか」

「あめ…
莉緒…あめ…
幸せだぞ…
「あめ…」
出して…私…
気持ちいい…」

「ああんっ！」

プロデューサーくんっ……！

ああっ……あ……あ……！

おっぱいで私達の愛の大きさを
感じ取ってよね……」

ドビュッ！

いっしょっ！

ムチャクチャっ！

アッ！

ドビュッ！

ドビュッ！

ドビュッ！

「おおおおっ……幸せだ……！
おっぱいに挟まれながら……！
「へへへ押し付けちゃおう」

「恵美ちゃん
おっぱいすご
プロデューサ
このふか、
癒やされー

「やうとアタシの番？
よーし、プロデューサー、
いっぱいサービスタゲるねっ！」

「ウフフ…もうこんな
天気の良いとき
昼からエッチしてるなんてねっ」

「ごめんね恵美ちゃん
二人きりにしてあげた方が
いいのかもしれないのに…！」

「お姉さん二人で
混ぜっっちゃってキス

「いい
細か
一緒に



言いながらの4Pの体勢はスゴく
俺の顔を舐める舐める。

3人の甘い舌が顔中を這い、
とろけてしまいそうだ。

「はあ甘いし気持ちいい……
ああああ……恵美……ああ恵美……」

「もおプロデューサーさあ
気持ちいいところわかり易すぎ
こうするのいいんでしょう？ハイ、ギョッッッ！
恵美の膣が締まる。」

「おお……ああああ
気持ちいい……ああああ恵美
「もっと気持ちよくなつて
気持ちいい顔見るのすごく
フッフッ 照れちゃってえカ

ズボ
ズボ
ズボ



「あはっ……あ……」
「あはっ……あ……」
「あはっ……あ……」
「あはっ……あ……」
「あはっ……あ……」

「あはっ……あ……」
「あはっ……あ……」
「あはっ……あ……」
「あはっ……あ……」
「あはっ……あ……」

「あはっ……あ……」
「あはっ……あ……」
「あはっ……あ……」
「あはっ……あ……」
「あはっ……あ……」

「あはっ……あ……」
「あはっ……あ……」
「あはっ……あ……」
「あはっ……あ……」
「あはっ……あ……」

「あはっ……あ……」
「あはっ……あ……」
「あはっ……あ……」
「あはっ……あ……」
「あはっ……あ……」

「あはっ……あ……」
「あはっ……あ……」
「あはっ……あ……」
「あはっ……あ……」
「あはっ……あ……」

「えへへ ありがとうプロデューサー」

まだ腰が止まらない。

「恵美っ……！」

「プロデューサーすごいよ
めっちゃ気持ちいいじゃん」

「あ……ああ恵美こそ……」

「アハプロデューサーって
やっぱりカワイイねっ♪」



温泉から上がった4人。

「湯上がり美人に見とれちゃうでしょプロデューサーくん」
「だが、ここで…」

「あれ？もう無くない？」

「ソンドームがここで数が切れてしまった。」

「アタシ買いに行くっか？」

「さすがにアイドルが避妊具を

買いにいったらまずいんじゃないでしょうか…？」

「それに地方行ってるアイドルのプロデューサーも

「ソンドーム買ってホテルに戻ったらなんかまずいんじゃない？

週刊誌とか張られてたらどうにするの？」

「まさにやっってるわけだしね」

まああとで処理しとけば大丈夫だよ」

「なっ 生でやるのか?！」

「そうね そうかも」

「いや だめだろ!」

「プロデューサーはいちいち細かいんだよなあ
アタシらが良いって言うてんだからいいの!」

「ちよ…ちよ…あっ…あーっ!あーっ!」

恵美は俺のペニスを手で誘導し…

ミッポ♡

「あつ……!? 恵美……!
気持ちいい……っ!」
「へへへ入っちゃったあ……
んっ……プロデューサーの……
きこるっ……」

んあ
あ……♡

フッ
フッ
フッ

生で味わう恵美の体……
熱い。ただでさえ風呂上がりで熱い
生の感触がいつそう興奮を増す。
「ますい……! じんの……凄すぎる……!
気持ちよすぎる……!」

「そんなに気持ち
いっぱい気持ち
プロデューサー」

パン
パン
パン

パン
パン

あ
あ
あ
あ
あ

しばらく時間が経ち…
「やばいっ…恵美…さすがに中は…」
「もお、大丈夫だっつてばプロデューサー」
アタシはプロデューサーに
気持ちよくなつて欲しいんだよ…？」

「プロデューサーさんっ…
気持ちよさそう…！」
「プロデューサーくん…
どうしてなのね…」

パン
パン

「プロデューサー…んんんんん
気持ちいいっ…気持ちいい
」あめあめあめ…恵美っ…
やばいっ…気持ちよめちぎる…

「プロデューサーっ…はた
あ…やばっ…んんんんん
あっ…気持ちいいっ…
」おの…恵美…おの…恵美

ビュル..
ビュル

コド..

はあ
はあ..

「恵美...すまん...出してしまった...」
「いいのいいの大丈夫だって
気持ちよかったよお...」

あっ♡ あっ♡

あっ♡

「あめ...あめ...ならならじゃだ
気持ちよかった...」
「にひひ〜アタシもお〜」

「次は私よお
り...莉緒...

「はあっ莉緒っ…まさか
莉緒とも生でしてしまつとは…」
莉緒とキスをして、腰を振る…
「気持ちいい？」
プロデューサーくん…」

「莉緒…外に抜いて出すから…」
「優しいのねプロデューサーくん
でも大丈夫よ…
受け止めさせて…」

169cmある莉緒の太
ごちらを包み込みようだ

「おちが…
掛けるのは
「あら？積
セラシーじ



しばらくお互い快感を
味わいながら、いよいよよ…

「あっ…気持ちいい…」

莉緒…俺は…」

「ねえ…気持ちいいわね
プロデューサーくん…」

うふふ 何も言わなくていいわよ…
今は…ただ気持ちよくなって…
私と…気持ちよくなるのよね…」

ドッ! ドッ! ドッ!
ドッ! ドッ! ドッ!

ずぶずぶ!

ずぶ!

ずぶ!

んんん

んんん

ムニ

んん

んんん!

んんん!

「莉緒っー! あっ…あ
気持ちいいっー! ああ
出る…莉緒の中に」

「莉緒…はあああ
莉緒…だめだ…
やっぱり…抜かない
「田んつプロデュ
「田んつー!」



「はあはあはあ……うう……
あ……まだ出て……
すまん莉緒……！」

「いいのよ……気持ちいいわよ
プロデューサーくん？
莉緒姉さんにもっと
甘えていいのよ〜」

「莉緒……莉緒……
ああ……気持ちいい……！」

「はあ……うう……いはい……
あったかいの……中……！」



莉緒の
何とも

「り…：莉緒まで中に…」

「もおく大丈夫だからっ

プロデューサーくんを

もっと近くに感じれて嬉しかったわよ」

「莉緒…」

「じゃあ最後は…：ねっ？風花ちゃん」

莉緒は風花に目配せする。

ベッドから降りて、恵美が寝ているベッドへ

莉緒も倒れ込む。

「私も少し横になるわねえ」

もじもじと裸の風花がこちらのベッドへ…。

「あ…あの…プロデューサーさん…」

「風花…」

「プロデューサーさんっ 私…」

もはや聞くのは野暮なのだろう。

目で合図すると、風花はうなずく。

俺はそのまま風花に体を預け、

濡れきった女陰に生で挿入する…。

「プロデューサーさん…」
「風花…いいのか…生で…」

「はい…プロデューサーさんの全部…
受け止めますから…」

「風花っ…風花…一緒
気持ちよくなるうな
「はいっ…プロデュー
もう気持ちいいです

風花のおっぱい
弾力があってと



ドク!
降!

ク!

「風花…あぁっ…風花…
風花の体…気持ちいいぞ…」

「プロデューサーさんも…
男らしくって素敵ですう…」

「風花っ…もうっ…出る…
出る…風花の…中じっ…あ…」

はっ♡
はっ♡
あっ♡

ふん♡

ぽん♡

ギョ!

ム!

「プロデューサーさんっ…
出して下さい…大丈夫です

「風花っ…出すぞっ…風
出すぞ…!—おおおおお

「プロデューサー
出してっ…あ…

風花の豊か
揉みまくり

ム!

ドク!

ム!



ドクドク!

ドクドク!

ドクドク!

ドクドク!

「んんっ!んんっ!
んんっ!んんっ!
んんっ!んんっ!

「んんっ!んんっ!
んんっ!んんっ!
んんっ!んんっ!

んんっ!
んんっ!
んんっ!

キス!

キス!

「んんっ!んんっ!
プロデューサーさん…んんっ!
「風花あ…んんっ!んんっ!

キスでお互いの
思いっきり風花
射精してしま

「おっ……おおおおおっ……
お……風花っ……あああっ……
あ……気持ちいい……」

「プロデューサーさんっ……んっ……
熱いっ……あ……気持ちいいですっ……
あ……あああああ！」

まだ射精が続いている。

「風花……あああ……おおお
風花……あ……風花……」

「はっ……あ……あああ
幸せ……幸せですうう……
プロデューサーさん……
ありつたけの精液を
全部子宮に注ぎ、満



そして気がつくと夕方近くになるうとしていた…
長い長い一日半が終わった。

「まあさ、ちゃんと対処しとくから
安心してよ！プロデューサー」

「…あ…あ…あ…頼むぞ…」

あとこれは秘密に…

しないとな…お互い…」

「うひひひ〜どじりかしらね〜」

「莉緒さんってばー！」

「冗談よ冗談っ当然じゃない♪」

「すまなかつた…だが…」

「わからぬもよろしく頼む…」

「暗いよプロデューサー」

そんなに気にしなくていいからー！

「とにかく、気持ちよかつたしねえっ♪」

「うん、気持ちよかつたよね！」

「私も気持ちよかつたです…」

「それは…俺もだ」

「よーしじゃ温泉巡りに行きましょー」

「さーんせーい！」

「私も色々行って見たかったんです」

みんな元気だな…

この一夜のことはまるで幻のように消えるのか、

どうなるか、いや、何かあつてはいけないのだが、

彼女たちが言うように、とにかく気持ちよかつたのは

紛れもない事実だ。

何度も幾つもの光景が今も鮮烈に目に焼き付いている。

強烈な体験だった。一生忘れられない経験になつたと思う…。

彼女たちの後ろ姿は美しく、
色気が増し増しになっていた…。

